

書評

今堀誠二著『毛沢東研究序説』

——勁草書房、一九六六年九月刊——

松野昭二

『毛沢東研究序説』は、今堀誠二教授の十数年にわたる研究成果を集大成したものであるが、それはつぎの二点において、とくにつよく私の心を引きつけた。すなわち、

(1)「この数年、私が業余のエネルギーの大半を傾注してきた平和運動と部落解放運動は、遂に、混沌に陥ってしまった。私自身も学問的低迷から、学問的頹廢に陥りはじめた。こうした難局を乗り切るために、毛沢東の理論を歴史学として再構成する努力をはじめなければならないと痛感するようになった」(二九九頁)。この労作が今堀氏の「難局を乗り切る」うえでどれほどの意味をもったかを、いま、私は読みとるこ

とはできないが、少なくとも、先学の氏にとって、毛沢東研究がいわゆるアカデミックな研究の対象としてではなく、歴史像の再構成という課題が社会的実践の場から鋭く提起されている現代に自らを厳しく位置づけることを媒介としてはじめて設定された研究対象であること、これは疑いのないところである。こうした問題設定は、それじしん後学の私の学風に対する批判的側面をふくむものであるばかりか、ひろく日本における中国研究、この場合、限定的には毛沢東研究のありように対する批判的側面をふくむものといわなければならない。

(2)「毛沢東はこれまでに、多くの論文を発表し、歴史を創

ってきた。新しい段階がくると、その段階のためにあらたなテーゼを起草するほか、過去に発表した論文にも手を入れて、新段階にふさわしい論文に書き改め、彼の理論を新しい次元で統一的に体系化しようとした。「したがって、毛沢東の理論を理解するためには、固定的・公式的にとらえるのではなく、発展的に把握することが、とくに大切となってくるわけである」。「毛沢東が自著の改訂をつづけていることは、彼自身の自己革命であり、『整風』である。整風運動は自己改造をすすめる思想動運であり、毛が自己の変革の体験を、全党員に追体験させる運動である」(四〇五頁)。このようにして、今堀氏は「毛沢東論文の年代史的研究」の必要性を指摘し、いわば「自己革命の連続が、毛沢東の真価だといえる」という捉え方に立って、その研究方法をつぎのように提示される。すなわち、「彼の論文は、大きくわければ、新民主主義革命の段階と、社会主義革命の段階に、大別することができる。後者の段階における毛沢東を理解するためには、前記の新選集(一九五一年以降の『毛沢東選集』(松野)を熟読玩味することが第一であるが、前者の段階については『時代が移って古くなった論文』を、それぞれ原稿なり、それが掲載

今堀誠二著『毛沢東研究序説』(松野)

された雑誌・著書(原載および補訂本)について、たんねんに調査することから、始めねばならないのである」(四頁)。このように、今堀氏は『新選集』所載の諸論文を原型ないし原型に近い文章と丹念に対比して、その異同を細かく抽出するとともに補訂の理由にまで分析をすすめることによって、「年代史的研究」のための素材を提出された。この方法は文献考証とよぶことができようが、それがよくみられるような書誌学の泥沼にはまりこむことなく、「年代史的研究」の一つの基礎を構築しえていることは、労作の展開過程がよく証明している。

では、今堀氏が提唱され、またみずから一つの基礎を設定された「年代史的研究」のより具体的な展開過程はどのようなものであるか。この労作の章・節編成をあげることによって大要をうかがうことにしたい。

序章 プロローグ(緒言のほかに、各章が節として配置され、レジュメの役割をはたしている)

第一部 第一次国内革命戦争の段階

第一章 草創期における国共両党の革命規定と階級分析

第二章 国共合作下の国民革命における敵と味方の階級区

分

第三章 北伐段階の農民組合運動と減租減息に対応する農村の階級区分

村の階級区分

第二部 第二次国内革命戦争の段階

第四章 井岡山以来の生産関係にもとづく階級意識の形成

と紅軍の整風運動

第五章 瑞金政権時代における工農兵ソビエトの土地革命

と階級分析

第六章 陝北政権時代における抗日民族統一戦線とソビエ

ト人民共和国の成立

第三部 抗日戦争の段階

第七章 抗戦初期における延安政権の諸政策と全人民の民

主集中

第八章 新民主主義革命の階級理論とその時代的特性

第九章 新民主主義革命における統一戦線の政治と経済と

文化の形態

第十章 辺区の経済危機と三・三制および整風運動

第十一章 連合政府論における人民民主独裁政権の政策と

地主・富農・資本家の立場

みるとおり、第一部、第二部、第三部という大別は、中国革命史または中国共産党史研究における通説に準拠している。第一部と第二部は毛沢東の階級区分・分析論の生成・体系化の過程を軸としてなりたっている。第三部は抗日民族統一戦線のもとでの、民主政権論と階級分析論を中心としている。氏じしんもいわれるように、毛沢東の論文は新民主主義革命の段階のものと社会主義革命の段階のものに二分することができるのであるが、今堀氏は一九四五年四月二十四日、中国共産党第七回大会での政治報告である『連合政府』についてをめぐる作業でもって筆をとめている。これはどうしてなのか。一九四五年四月は第二次世界大戦の終末期ではあった。新民主主義革命の段階のそれではない。通説によれば、新民主主義革命の段階には「抗日戦争時期」のあとに「第三次国内革命戦争時期」または「人民解放戦争時期」がおかれる。これを前提とすれば、この労作を『毛沢東——新民主主義段階——研究序説』とよぶことに、いささかためらいを感じる。「人民解放戦争時期」を新民主主義革命の段階からはすす何らかの理由があつたことなのか。それとも、文献考証をすすめるに十分な材料に不足するからか。または

原型・原型に近い文章と『新選集』所載のものとの間にまったく異同がみられないか、みとめられたにしても「年代史的研究」にとつて意味をもちえない程であるのか。この点についてはあらためて教示をうけたい。

みぎの点はともかくとして、今堀氏の提示された「年代史的研究」の具体的手法のあり方からして、当然、私はその手法展開したいのなかにたちいるべきであろうが、それは「複雑な考証の連続」を倍加し、論点をまったく混乱させてしまふ恐れもあるので、第一部・第二部にかぎって若干、私なりに問題点を提起するにとどめたい。

二

第一章は、一九二六年はじめ毛沢東の階級分析論が登場するまでに、中国共産党とその周辺にあった「革命規定と階級分析」を対象としており、本論ぜんたいの導論的役割をはたしている。今堀氏の整理によると、この時期における「革命規定と階級分析」の潮流はつぎのようである。

「革命の性格については、ブルジョア民主革命・国民革命といった名称上の差異は、さして重要ではない。国民党はブルジョア革命をめざしており、共産党はブルジョア革命をす

今堀誠二著『毛沢東研究序説』（松野）

すめて、その成功後に、プロレタリア革命に追い込むのだという考えである。しかし、ブルジョア革命を統一戦線によって進める点では、両者はほぼ一致しているから、どちらの用語もほぼ同じ内容をさしていたわけである」（五七頁）。階級区分・分析論については、「一つは、中共二全大会決定の、工人・農民・小資産・資産の四階級を、一応の基準とするものである。内容的には、これを全部革命的とみる二全大会の見解に対し、この中の一部の階級を反革命とみ、または各階級の中にそれぞれ革命派と反革命派があると主張する見解も生まれている。……陳独秀と彭述之が資産階級について、それぞれすぐれた見識を示しているが、その見解は相互に著しく相違しており、理論的にもまだまだ弱い弱である。何よりも階級とは何かが理解されておらず、生産関係に焦点がおかれていないことが、致命的といえる。……これらとは見解を異にし、地主と農民を軸とし、階級区分を考えたのが、彭湃と孫文である。彭は自作・雇農など、農業の経営方式によって、農民を細分するとともに、地主に対しては烈しい敵意を表明している。孫は地主に土工商を含ませる一方、農民には土地改革を説いている。いづれにしても、地主と農民の階級

対立をとりあげた点は、反封建革命への展望をもっていたこととなるが、土地所有における生産関係の理解に欠け、また労資の対立との関連性が考慮されていないので、正しい革命路線をしくことが、できなかったのである」(五六―七頁)。

草創期における国共両党の革命規定と階級分析をあつかうにあたって、共産党二全大会・三全大会やその他の公式会議の諸文件を手がかりとするほか、陳独秀・孫文などの論文・演説を素材とされた手堅く慎重な作業によって、諸潮流のあり方が的確に示されている。なかでも、陳独秀の革命規定・階級区分の「右翼」的弱点の剔出は見事である。にもかかわらず、つぎの点を提起しておきたい。その一、氏のいう国民党は一九二四年一月の改組(連ソ、連共、扶助労働)いこのものをさしている(五一―二頁)。だが、この時期はあきらかに国民党の草創期ではない。国民党の草創期をどこに求めるかは諸説あるが、このばあいでは、中華革命党の名称を国民党と改めた一九一九年十月頃から一九二〇年十一月の『新政綱』(「国民党が無産政党たるべき傾向を示して来たのは、これにはじまる。橋樑『中国革命史論』二五頁)発表までの一カ年であったとみるべきではなからうか。その二、みぎの点はさておき、

改組国民党はたして共産党と同じ意味での「政党」と規定し位置づけうるものであろうか。ほぼ同時期に、スターリンが「労働者・農民・インテリゲンツィア・都市の民主主義分子の革命的ブロックであり、その基礎は……これから諸階層の階級的利害が共通なことになる」(「国際情勢とソ同盟の防衛」とらえ、また瞿秋白が「国民党の問題とはどんな問題か?それは二重の意義をもっている。一つは各階級結合の形式であり、他の一つは国民革命の政権の形態である」(「中国革命と中国共産党」一九二八年五月中共六回大会への報告)とした見解などをはじめとして、通説はいずれも改組国民党を単一の「政党」とは規定せず、むしろ統一戦線の組織形態であると規定している。この規定の妥当性がゆるがない限り、改組国民党を共産党という「一つの政党」と対置するに際しては、慎重な考慮が必要である。その三、「いずれの用語もほぼ同じ内容さしていた」とする叙述が国共両党の対置あるいは諸説の流動的展開を前提とするものであるかは、まだ保留点をふくむが(国民革命という用語は両党の共通語でもある)、はたして統一戦線によってブルジョア革命を進めるといふ戦略・戦術上のほぼ一致を根拠にして革命規定の同一性を肯定でき

るであろうか。たとえば、陳独秀のばあい、指摘のとおり、「工人階級は連合戦線のない手ではあるが、経済的にも思想的にもおくれ、封建社会の制約をうけ、国家観念も階級的自覚もないか、独立の革命ら動力とはいえない」という論（四九頁）をもち、「植民地半植民地の社会階級は固よりすべて幼稚であるが、資産階級の力はどうしても農民より集中されておき、労働者よりは雄厚」であって、「国民革命の勝利は、もとより資産階級の勝利である」という革命規定にたっていた（『支那国民革命と社会各階級』『支那革命論文選』）。私は陳独秀のこの革命規定はあきらかに二全大会宣言の後段によく示されるような「二回革命論」を拡大して反映するものであり、国民革命の、したがって改組国民党における主導権をブルジョアジーに譲渡し、国民革命を実際上ブルジョア的な枠のなかに閉じ込める立場であるとみている（拙論「第一次国共合作と二つのヘゲモニー論」、関外短大論集第六号昭和三十六年三月）。たしかに、用語上の差はさして重要ではない。重要なのは中国のブルジョア民主革命それじたいのなかに革命の「非資本主義的前途」をみいだすかどうかであって、この見地からすれば、統一戦線によって革命をすすめる点で一致したことを

今堀誠二著『毛沢東研究序説』（松野）

根拠にして、革命規定の同一性を問うことは誤りでないまでも、きわめて不十分であるといわなければならない。その四、階級区分論を陳独秀・彭述之のラインと孫文・彭湃のラインに大別することで、私じしん一つの示唆をうけた。つまり、私は二つのラインを「理論」派と「実践」派、あるいは「近代」派と「封建」派のそれとして整理できるのではないかと感じている。ところで、二つのラインとともに「生産関係に焦点がおかれていないことが致命的といえる」といい、「国共合作をはじめとするすべての決定がコミンテルンの指導で行なわれ、中共としてはこれを十分に消化できず、階級区分についても思いつきの域に出ていなかった」（五一頁）といわれるとき、共産党ないし個人の主体的なとらえ方の未熟を問うとともに、半植民地・半封建社会の複雑な階級関係——そこに民族関係がからまる——が存在し、また、国民党改組いご政治的緊張が上向するなかで階級関係が急激に変化した事実過程をも問うべきである。

三

今堀氏の手法は、毛沢東のごく初期の論文をあつかうなかでもっともよく活用される。『毛沢東選集』の冒頭にある「中

国社会各階級の分析」（一九二六年三月）にさきだつ四つの論文を毛沢東の階級論ひいては毛沢東思想の原点とすることからはじまる。すなわち、「北京政変と商人」、「省憲経与趙恒惕」と「紙煙税」（ともに『嚮導』一九二七年八月）の三短編、および「中国農民のうちの各階級の分析およびそれらの革命に対する態度」（『中国農民』第一期一九二六年一月）である。

氏によると、一九二三年の三編は「軍閥官僚資本の中国政府を諸外国の共同の番頭と規定したことは、核心をついた問題提起であり、権力支配に抵抗して革命の主体となる『人民』を見出した意義も大きいが、その理解は、孫文や李大釗に比してあまりに単純かつ、常識的である」。だが、あとの一編は「彭湃について、中国で農村の階級構成を系統的にまとめた論文であり、しかも革命に対する態度を的確につかむことを目的とし、搾取関係を中心にして、独創的な階級分析を行なった点において、まさに画期的な秀作である」と評価される。そして、三カ年のあいだに、「単純かつ、常識的」な理解から「画期的な秀作」にいたった理由を、一九二三年まで「革命を頭で考えていたインテリ思想家」であった毛沢東が、一九二五年の五・三〇事件を湖南でむかえ、「農民組

合の結成にのり出したのち、広東に移って国民党宣伝部長代理に任じ、ここで湖南農民運動の経験を整理して」かきあげた点にもとめられる（六一～二頁）。毛沢東をインテリ思想家とみることにについては、辛亥革命時に長沙革命軍に参加した事実、一九一九年五・四反帝運動のとき湖南学生連合会を組織し、軍閥張敬堯の弾圧に抗してついに湖南全省のストライキ指導にたずさわった事実、また共産党創立大会（一九二一年七月）に湖南代表として何叔衡とともに参加した事実などからして、にわかには賛同しがたい。しかしながら、毛沢東じしんが「農民のあいだの階級斗争の運動を十分に理解しなかつたのですが、五・三〇事件以後、またそれにつづく政治活動の大波がつづくあいだに、湖南の農民運動は非常に戦的になってきました。私は自分の休養していた家を去って、農村の組織工作を始めました」（スノー『中国の赤い星』）と語っているように、毛沢東にとって五・三〇事件は農民問題に着眼させそこに身を投じさせた意味で、ロシア社会主義革命と五・四反帝運動につぐ第二の思想的な飛躍台であった。この飛躍を四つの論文でもって明白に裏づけられたことは、「年代史的研究」がもたらした一つの成果であるといえよう。

「中国社会各階級の分析」については『中国農民』原載の文章と新選集本所載の文章が丹念につきあわされた結果、補訂の基本点をつぎのように要約される。「階級区分の基準については、原文では富(産)の配分に応じて五段階を設け、『天が設け地が設けた』自然法則によって、上等中等下等の相違をあきらかにしたとのべている。こうした考え方はのちに毛沢東自身によって撤回され、新選集本では、右の基準と表現はすべて削除されている。代って意識的に使用された字句が、『生産関係』『生産力』『労働力』という言葉であって、少なくとも、新選集本の意図が、(1)、帝国主義的生産関係に規制された地主買弁階級、(2)、資本主義的生産関係を代表する中産階級、(3)、小商品的生産関係にたつ小資産階級、(4)、細小生産関係による半無産階級、(5)、労働力のほか、何も持たぬ無産階級、という形に、再整理するつもりであったことは確かである」(八七頁)。「分析」原文が「階級規定を富の程度と収取関係におく」(七七頁など)点でさきの「……態度」との間に若干の逆接続の面をふくみつつも、「農民運動を推進する上に、すぐれた武器となった」ことは「歴史事実が証明している」(八九頁)としながらもそれが補訂されたのは何

今堀誠二著『毛沢東研究序説』(松野)

故であるか。この理由はつぎのようである。原文は「国民党の立場に立つ論文であったから、大きな枠がかぶさっていた」。「系譜的には彭湃の農民区分を準用したが、新選集本は、北京政府の立場からみた革命理論の所産であって、革命の次元を異にする点こそ、重要な『書き替え』が行なわれた原因である。社会主義革命の推進がねらいであるから、反帝・反封建を堅持するのは当然として、資本主義生産・小商品生産・細小商品生産・社会主義生産を代表する各階級を、おしなべて社会主義の大河に流しこむことが、新版『分析』の役割となった」(八九頁)。

「分析」原文が富の程度と収取関係、経済状況とか生活苦を基準とする「米ピツ論」的側面をもつことを明示し、「新選集本のみによって、一九二六年の歴史を語ることは不可能である」(七七頁など)と指摘されるが、それは同時に一九二六年当時の毛沢東を語ることの不十分さを指摘することでもある。そして、この指摘は毛沢東思想の「年代史的研究」が、原型・原型に近い文章を時期の推移につれて組み立てる「タテの線」と新選集本による「タテの線」、および原型・原型に近い文章から新選集本への「書き替え」という「ヨコ

の線」を刻明に追いもとめからみあわせることによって、はじめて全面的に成立することを確認させるに十分なほどの重みをもっている。だが、「ヨコの線」が生れてなければならなかった原因を主として「革命の次元を異にする点」に帰着させるあり方については、疑問をもたざるをえない。「革命の次元を異にする」新民主主義革命と社会主義革命は、一九一七年社会主義革命いこの世界的条件の下では、プロレタリアートの思想・政治および組織的な準備の成熟度と、プロレタリアートと貧農の団結の程度によって、連続的に発展するとされている。発展段階を異にする革命の連続発展の可能性とその現実を前提とすれば、階級区分・分析を全体として半植民地・半封建社会の複雑な生産関係に基準を置いてあすところなく的確に行なうことは、後統する社会主義革命のまま推進にとつてのみでなく、先行する新民主主義革命にとつても第一義的に重要であったし、またこれなくしては連続発展の展望をもちえないといわなければならない。したがって、「書き替え」はたんに社会主義革命という新段階に適合させるためだけでなく、時代の制約をうけた「分析」を連続発展論がしだいに形成された革命の総過程をふまえ、それが

現実となった時点で階級分析として完整化させるためであったみるべき側面をふくんでいる。完整化の側面をおとすならば、「ヨコの線」が「年代史的研究」を支える一本の柱となることはできない。もちろん、氏は「過去に発展した論文にも手を入れて、新段階にふさわしい論文に書き改め」とみるときに、「彼の理論を新しい次元で統一的に体系化しようとした」（四頁）と指摘されているが、「新しい次元」を「革命の新しい次元」と展開する限りでは問題がこされる。さらにいえば、時代の制約をうけた「分析」がそれにもかかわらず十五年の後に階級区分・分析論として完整化されうる、完整化の素材となりうる契機をどのようにふくみ、またふくみえたかを問うことこそがのこされたもつとも主な課題であり、この課題にとりくむことなしには毛沢東思想の形成史を書くことはできない。

「湖南農民運動視察報告」（一九二七年三月）については、「分析」のばあいと同様に「加除修正が必要とされる理由は、革命段階の相違にあった」（二〇〇頁）とされるが、この点は再論せず、「農民を三つに分けるその基準が、米ビツ論である」（二〇一頁）と指摘される点にかぎってのべたい。今堀氏

がいわれる「米ビツ論」とはほぼつぎのような内容をもって
いる。すなわち、「分析」の半無産階級を対象とするくだ
りでは、「経済状況とか生活苦とかが、そのまま直線的に革
命性に直結するという考え方は問題であるが、中国革命が生
きていける極限状態において行なわれていた点を考慮すれ
ば、現実に即した『理論』であり、一つの側面を明らかにし
たものといえるであろう。……富の配分論では、マルクスの
階級理論には合致しない」（八一～二頁）。「報告」では、「そ
の基準が、米ビツ論であることは、『佃戸（小作農）』であ
っても、生活に余裕のある富佃は、次貧に入らない」という規
定を設けていることから明らかである。……新選集本では
省かれているが、原文では『錢や穀に余剰があるものを富農
とよぶ』、『錢や米には余剰はないが、さらばとって足りない
程でもなく、毎年何とか衣食住をまかなっていけるものを
中農とよぶ』、『（貧農は）農村の中で生活が落伍あるいは半
落伍のものである』という説明がついている」（二〇二頁）。
『報告』では、経営形態にもとづく区分を一擲して、米ビツ
論にしぼった。「毛沢東は『態度』や『分析』において、自
耕農の中に、錢米に余剰のあるものと、かろうじて自給自足

今堀誠二著『毛沢東研究序説』（松野）

できる者と、赤貧組とを区別しているが、『報告』では自耕
農の枠内だけでなく、全農民に『米ビツ』の基準を適用した」（
二〇五頁）。だが、この「米ビツ」論を「農民協会への参加
・不参加を基準とした判断であるから、それなりの妥当性は
もっている」（二〇二頁）と評価し、また「毛沢東が、湖南
農民運動の実体から、農民を三つに区分することを考えつい
たわけであって、農民運動の中から生まれた階級区分論であ
ることに、大きい意味がある」（二〇五頁）とされるとき、階
級区分の基準が文字どおりの「米ビツ」にのみあるのではな
く、当時、農村における階級斗争として推進された減租減息
運動に対する農民各階層の支持・参加の度合をも基準とした
ことを今堀氏を読みとっている。これをもふくめて「米ビツ
論」という言葉でよぶことに私は抵抗を感じないわけにはい
かない。

四

一九二七年八月いご、とくに一九三〇年五月に第一回ソビ
エト区域代表大会が開かれていご、毛沢東の階級分析は第二
のピークをむかえた。今堀氏は、『暫行土地法』（一九三〇年
五月）、「土地法草案」（同九月）、「土地法」（一九三一年十二月）

一五一（二八三）

および「各種工農階級の解釈及其対策」(中共寧都県委員会発行だが中央制定と判断される) という一連の公式文書・文件が、「社会主義の方向につき進んだ点で、根本的な誤をおかしている」李立三、王明・博古・周恩スの影響をうけながらも、

「階級区分は生産関係により、地主・富農・中農・貧農・雇農に大別されているし、土地革命の内容も、地主富農的所有から雇貧農中農的所有への移行を主張したわけで、一貫しているというべきであろう」とのべ、とくに「解釈及其対策」は「土地法の階級区分に対して、搾取関係にもとづく明快な概念規定を、あたえた。……封建的搾取と資本主義的搾取とを区別しながら、その組み合わせを考えて、搾取するばかりのもの(地主)・自ら働くが搾取するもの(富農)・搾取されずまた搾取しないもの(中農)・農村の半プロレタリア(貧農)・農村のプロレタリア(雇農)を設定したことは、階級区分論にとって、画期的な成果となっている」(二九〇―三〇一頁)とのべられる。そして、公式文書・文件が画期をむかえる過程と、毛沢東の農村調査が互いに裏うちあいつつ彼の階級区分を最後に完成させていく推移を指摘される。すなわち、「一九三〇年十月および十一月に行なったものは、土地

法草案ができた直後にあたるから、草案に依拠しつつその再検討を考慮したものであろう。……第二回は一九三三年の八月に行なわれた才溪郷調査で、土地法と対策に依拠しつつ、土地革命の実状をしらべて、その補正の資料に役立てることを、意図したものと考えられる。同年九月に始まった「査田運動」は、新しい階級基準を設け、土地の再分配を行なったが、才溪郷調査がその契機となったわけである。第三回は同年十一月の長岡郷で、この査田運動の点検である(二三一頁―三二頁)。このようにして、「怎樣分析階級」が「暫行土地法以来の経験を積んで、これを補正した上、体系化した点で、ソビエト段階における階級区分論の頂点」(二四二頁)をなすものとして誕生する。

「怎樣分析階級」は一九三三年十月十日「査田運動指南」の一部分として発表されていご、「關於土地闘争中一些問題的決定」とともにいくども補訂された。すなわち、「一九四七年以来中国共産党重要文件集」所収の修訂版、一九五〇年八月四日に政務院によって「怎樣分析農村階級」(關於土地改革中一些問題的決定)と改題して発表された版、新選集所収の前者の修訂版である。氏は「査田運動指南」の原文に

よって、『階級』を紹介し、あわせて文件集・政務院決定・新選集本等のおもな相異点を指摘すると、左の如くなる「(一三五頁)とのべて、つぎのようにとりまとめられる。すなわち、『階級』の原文は、文件集によって大きく書き改められたのであって、その削除と修正は、『一小部分』とか『少しばかり』とかいえる程度ではなかった。一九四七年以後の革命段階に即応しての修正であることは勿論であるが、ソビエト段階への自己批判といえなくはない。修正点のポイントは、第一に文件集が、ソビエト政府の政策について、解説した部分を、全部削ったことである。階級区分についての基準をスキリ示すために、政策論をばいしたともみられるが、ソビエト共和国と人民共和国では、段階を異にするので、ソビエト政策を、第三次国内革命戦争にもち込むことは有害だと判断してこの挙に出たことは否定すべくもない。文件集の『階級』と『決定』を通じて、富農と貧農の叙述が、大幅に書き改められたことが第二点である。富農に関しては、一面では『富農分壊田』の政策を全面的に改正し、他面では富農にも土豪劣紳がいることに注意を喚起して、左右の日和見に陥ることを戒めているのであって、ソビエト段階の欠陥を、

今堀誠二著『毛沢東研究序説』(松野)

間接的に自己批判しているわけである」(一四二〜三頁)。みるとおり、政務院決定や新選集本との比較よりむしろ文件集との比較に力点がおかれており、例によって、一九三三年と一九四七年との革命段階の相違が補訂の理由とされている。「ヨコの線」の追求を一つの軸とするところに氏の「年代史的研究」のきわだった特長があるわけであるから、当然、政務院・新選集本との比較検討によって「ヨコの線」が引きつくされるべきであろう。また、「革命段階あるいは次元の相違」をいうとき、一九三三年と四七年が、新民主主義革命における段階差であり、一九三三年と五〇・五一年が新民主主義革命と社会主義革命との段階差であること——他の文献をあつかうところでは後者の段階・次元差が指摘された——を考慮しなければならぬ。ところで、文件集・政務院決定・新選集本の「段階」差を問題とするさい、つぎの事実経過をつきあわせることが有意義であると思える。文件集は、抗日戦終了後内戦必至の状況のなかであらためて土地問題を提起した『五・四指示』(一九四六年五月四日、中共中央)から『土地法大綱』(一九四七年十月十日、中共中央)の時期にほぼ一致する。『五・四指示』は、(一)中農の土地を侵害しない、(二)一

般に富農の土地を變動しない、(三)中・小地主の生活に配慮する。四漢奸・土豪劣紳・ボスに対する闘争、(四)土地の平等分配、(六)分地所有権の保証、(七)農会・民兵等の發展などの方針にしたがい、各解放区の具体的条件に依りて土地改革を実施するよう指示したものであり、山東・陝甘寧・東北の各解放区で実施された。『土地法大綱』は「五・四指示」のうち(一)・(三)を取りけし、「貧農に依拠し、中農とたくく連合して、地主旧富農の搾取制度を消滅し、彼らの得べき土地の財産は、農民大衆より多くあつてはならない」(「目前の形勢と我らの任務」)とする方針にたつて、「郷村の全人口に照して老若男女を問わず、すべて平等に分配する」土地改革をはかったものであった。一九五〇年の春までに、東北・華北・華東・中南・西北各区の一億五、五八〇万の農業人口地区で実施された。一九五〇年八月四日の政務院決定は『土地改革法』(同年六月三〇日、中央人民政府)をうけてその実施基準を示そうとしたものであるとみてよく、新選集本は実施過程を多少とも反映したものとみてよい。『土地改革法』は中華人民共和國の成立という新段階の到来ともあひまって、『五・四指示』が示した方針に復帰する側面をもちつつ、富農の土地・

財産を動かさず、原耕農民の耕作権を保護することなどを前面におしだして(したがって、分地面積は一郷村内でも不均等である)、農村に生ずる無用の混乱をできるかぎり少なくし、地主的土地所有を廃棄して農民的土地所有を確立し、生産力を解放して新中国工業化の道をひらくと図った。一九五〇年秋から『土地改革法』が新解放区で実施にうつされ、五三年初には「三年前すでに土地改革を完成していた旧解放区を加えて、土地改革を完成した地区の農業人口は、合計全国農業人口の九〇%を占める」ようになり、ここに土地改革は蒙藏地区や少数民族地区をのぞいて全国的に完了した(廖魯言「三年来土地改革運動的偉大勝利」。このように、『五・四指示』・『土地法大綱』・『土地改革法』はそれぞれ「革命の段階の相違」を反映しているわけであるが、これと「階級」の第二修訂版、第三・第四修訂版はどのように内容的に対応し補訂されているのであろうか。第三・第四修訂版のうちとくに新選集本は、中国の農村において土地改革実施のなかですでに生産互助組加入農家の全国農家に占める比率が一九五〇年に一〇・七%、五一年では一九・二%にたつていた事実、すなわち「土地改革を基礎にして農民がしめた生産に対す

る積極性は、二つの面にあらわれている。一つの面は個人経営経済の積極性であり、他の面は互助協同の積極性である（中共中央、「農業生産の互助協同についての決議」一九五一年十二月草案試行）ととらえられた農民の共同富裕化集団化——への端的な途をふまえているからこそ、「一九五一年の革命を指導するためのテキスト」（二三五頁）ともなりえた。新民主主義革命の一段階において土地改革（これはそれ自身で決して社会主義的性質をもつものではない）実現のための「画期的」な階級区分・分析をなした「階級」が三度補訂されることによって、半植民地・半封建社会の革命の成否をわけらる階級区分・分析として全体像を形づくる過程を追求すること、この作業こそは「年代史的研究」を完結させる一つの契機である。

おわりに、この著書のなりたちの外にでることではあるが、つけ加えておきたい。それは毛沢東思想の「年代史的研究」をすすめるにあたって、理論的対立、論争史をふまえることについてである。導論的役割をはたしている第一章ではこの点にふれられている。それとても、公式文書に準ずる素材でもってされたにとどまった。時代が下るにつれ、また

毛沢東の指導権が確立されるにつれて、毛沢東思想の形成史に對立しからみあった對立理論を過不足なくあつづけることは容易な作業ではなく、不可能に近いかもしれない。だが、つぎの二つの流れをおうことはできるし、有意義であろう。一つは、コミンテルンに内在した一連の論争であり、スターリン・ブハーリン、とトロツキー・ラデック論争である。二つは、「社会史論戦」である。いうまでもなく、この論戦は一九一九年「五・四運動」の前後からはじまるが、一九二七年の国共分裂、国民革命の挫折を契機として社会性質および社会史に関する論戦が引きおこされ、ついで、一九三四～五年には農村社会性質に関する論争が展開された。この論戦は中国における講座派・労農派論争ともみるべきものであつて、毛沢東思想の礎石に一定の影響をあたえているであろう。